山梨大学教育学部附属教育実践総合センター

センターだより第２１４号(通巻第２８１号)

2024 年 12 月 2 日 発行
山梨大学教育学部
附属教育実践総合センター
TEL　055-220-8325、FAX　055-220-8790
E-mail: edjissen-as@yamanashi.ac.jp
URL: https://www.edu.yamanashi.ac.jp/aepc/

※このセンターだよりで紹介した研究会、研修、教育フォーラムに関するお知らせは、改変しない限り、自由に複写、配布していただいて結構です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊コンテンツ一覧＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

■令和６年度 子どもと教師の成長を結ぶ教育評価研修会 の報告

■令和６年度　第１回　不登校の子どもを支える保護者の会
　親業セミナー＋情報交換会　報告

■やまなし情報教育推進室 先進校視察報告

■山梨県立高等学校　情報科の授業視察等の報告

■第４５回教育フォーラム：ICTを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現
ーこれからの授業の在り方を考えるー

■地域学習アシスト事業 成果パンフレット～５年間のあゆみ～の報告

■１２月・１月の主な行事予定

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

これまでのセンターだよりの一部は、https://www.edu.yamanashi.ac.jp/aepc/2306/ で見ることができます。

令和６年度

子どもと教師の成長を結ぶ教育評価研修会

－ＯＰＰシートによる学習指導と評価の一体化－

＜事業概要＞

山梨県総合教育センターとの共催により「子どもと教師の成長を結ぶ教育評価研修会－ＯＰＰシートによる学習指導と評価の一体化―」を開催しました。

本研修は、学習指導と評価の一体化を可能にし、授業方法の改善につなげていくための方法である OPPA（1 枚ポートフォリオ評価）についての研修会です。

本年度は、OPPA の中核をなす「本質的な問い」の立て方、自己肯定感を促す学習履歴の見取り方などを OPPA の基礎的な理論、事例、グループワークを通して学修しました。

更に、授業を通じて児童生徒の自己肯定感を高めるためのワークショップなど、実践的な演習を中心とした研修を行いました。

〇峡東会場：令和６年８月８日（木）　峡東教育事務所（東山梨合同庁舎）

〇中北会場：令和６年８月９日（金）　中北教育事務所（北巨摩合同庁舎）

＜講　師＞

辻本　昭彦　先生
（法政大学生命科学部生命機能学科　教授）

本研修会は、山梨県総合教育センターとの共催事業として、総合教育センターの研修計画に組み込んでいただき、県内すべての学校に周知すると共に、各地区の教育事務所にもご協力いただきました。本年度は、通常の形で実施することができ、多くの方に参加していただきました。

＜内　容＞

本年度から理論編も実践編ともに辻本先生にご担当いただきました。研修会の前半では、OPP シートのねらいや作成に必要な構成要素などについての OPPA の概要と理論について、ご講義いただきました。

講義の後半では、OPP シートの本質的な問いをどのように立てたらよいのか、自己肯定感を促すための評価の見取り方コメントの書き方など、OPPA の具体的な進め方等についてワークショップを行い、最後に主体的に取り組む態度の評価と OPP シートとの関連についてのレクチャーがありました。

＜受講者＞

◆ 研修会　45名

内訳：小学校18名、中学校4名、
高校11名、支援学校５名、
その他(行政・専門学校等7名)

＜成果と課題＞

研修会で各自が記入した OPP シートによると、多くの参加者が自分の授業に対する考え方が変容したり、評価方法を工夫する必要性を感じたりしたことで、今後取り組みたいことが明確になったと記述していました。

○総合教育センターの研修会アンケートより

研修会は役立つ内容であったか

満足した　98%　　どちらでもない　２%　　満足しなかった　0%

本研修会を通して、評価の本質についてとらえなおし、授業に対する考え方が変容した教員が多くいました。また、研修後に実際に事業等で OPP シートが活用されたことは、大きな成果と考えます。

本年度は経験した方も初めての方も研修を深めていける内容とし、基礎、応用と分けずに実施しました。また、実際の授業に活用できる研修となるよう、実践編の時間を多くとりました。今後、さらに内容を充実させ OPPA への理解を深めるとともに、OPP シートの活用を広めていくことで、多くの教員の授業力向上に役立てていただけるような研修にしていきたいと思います。来年度も総合教育センターの外部研修としては、７月 30 日、31 日に実施する予定です。

◇研修会での受講者の OPP シートより

- 授業づくりにおいて大切にしなければならない点、また、子供の見取りや本質的な問いづくりの大切さを学ぶことができました。グループワークで議論・対話をする時間を設定していただいたことで自身の考えを広げ整理することができました。（19 年目の先生より）
- 受講前に書いたことも自己肯定感を上げるために必要なことだけれど、講演を聞いて、それぞれが自己肯定感という一つのものにつながっているんだとわかった。（２年目の先生より）
- ひとりひとりの子どもの成長を引き出すには教師自身が子どもたちをよく知り、良さを見つけることが、受講前に書いた大切な部分につながっていくことに気づくことができた。（５年目の先生より）
- 受講したことでどのようにすれば子供自身から主体的に学ぶことができるかという視点が変わったと感じます。（6 年目の先生より）
- 自己肯定感を高めること、「できるじゃん」の気持ちがあることで学習に向かう子供の態度が変わると感じた。受講したことで、教師がする手立てに対して子供がどう反応し成長するかということを考えるようになった。（３年目の先生より）
- 自分の良さが自分ではなかなか気づくことができず、他者に言われないとわからない。学習の面白さ、学習する意味が大切だと改めて感じた。（19 年目の先生より）
- 受講したことで子供たちにどんな力をつけさせたいか、子どもたちの自己肯定感を高めたいという教師の意図を持って指導することが重要だと思った。その上で最初に書いたフィードバックや見取りが役立つと思う。中高では特に評定にとらわれがち、柔軟性を持って自分の考えを整理したり、現場の先生方に伝えていったりしたい。（15 年目の先生より）
- OPP シートは成績には直接的には入れず、むしろ子どもたちの自己肯定感に結びつく可能性へと続くメタ認知を引き出すことが大切だと思った。OPP シートを使い授業をしてみたいと思った。最後の動画を見て道徳で実践してみたいです。（３年目の先生より）
- 自己肯定感を高めることでくじけそうな時もなんとかなるとのり切ったり、復活したりする力になることが実感できた。傾聴姿勢を大切にして子どもの心に寄り添い、これからも子どもの成長を見守っていきたい。（15 年目の先生より）
- 自己肯定感を高めるためには他者とのコミュニケーションが重要であることが分かりました。昨今、学校は今までと価値観が変わってきている状況ですが、やはり共に学ぶという活動の大切さを感じました。受講後、相手の意見を聞くこと、自分の意見を言うことについて、これまではそんなに重要だと思っていなかったがとても大切だとわかりました。OPP はスタートして長い年月がたっていると思います。OPP を実施してきた子供達のその後が知りたいと思いました。（18 年目の先生より）

- 受講後には、より子供主体な視点になったこと、出発点は子どもの見取りでそれを踏まえての個別最適な環境整備をしていくことの大切さに気づいた。生徒が生きていて良かったとか、これから生きて行くぞと体感できるような取り組みをしていきたい。（33 年目の先生より）
- さまざまな校種の先生方の話が聞けてとても勉強になり楽しかったです。評価は観点別評価ということを主に考えていましたが、査定しない評価の面白さ、学びの楽しさに気が付けて良かったです。（12 年目の先生より）
- 毎時間 OPP シートを書かせた方が良いのか単元末でもよいかを知りたい。また OPPA の記入例シート例をもっと見たいです。自分自身 OPPA を知らず、毎日の授業での振り返りの時間をきちんと設けていないので、生徒自身の成長のためにも OPPA を活用して行きたいと感じました。（22 年目の先生より）
- 受講前は短いスパンで教員側の出来ることに焦点を当てすぎていたように感じる。しかし、生徒の状態や考え方が、その生徒の成長につながるサイクルがあることを今回の研修で認識した。OPP シートについて、各教科・科目の向き不向きについてさらに知りたい（6 年目の先生より）
- 自己肯定感を高めることや日々能力を高めるために OPPA が有効だということがわかった。これまでこちら側の視点のみあげていたが、学習の改善という視点に気がつくことができた。また、評価という言葉のイメージが変わった。（11 年目の先生より）
- 受講前は授業の展開に重きを置いて考えていたが、辻本先生のお話を聞いて子供が主体的に学んでいくためには、自己肯定感を育んでいくことが大切なのだと感じた。主体的に学んでいく学びの中で子供は成長して行くのだと思う。（13 年目の先生より）
- 学習することを通じて子どもの成長があること。それを目指して授業をすること。また、授業を通して自己肯定感をはぐくむことが大切だと思った。（27 年目の先生より）
- 受講前は自分がどうしなければいけないかという考えだったが、受講後は子供達から教えてもらう、導いてもらう授業作りをしていくことに考えが変わった気がします。学校ではどうしても評価をしていかなければならない中で、個々の考え方が違う OPPA の評価を他の教員と共有できるのか、とても難しいと感じました。教員同士の共有はどのようにしてそれは良いか知りたいです。（29 年目の先生より）
- アイスブレイクの自己紹介で、自分では気づかない他者から見た自分の新たな側面に気づき、いいところ探しの効果を実感しました。教員も子供も楽に、とらわれすぎず子供のいいところを見つけていくことを通して、子どもの成長を引き出して行きたい。（16 年目の先生より）
- 辻本先生の熱量を感じました。同じことを何度も聞いていると言われましたが、何回聞いても新鮮で。明日から頑張ろうという気持ちになります。他校種の先生方と交流でき

たのも良かったです。嫌な気持ちに全くならずにワークショップを進めてくださったのはさすがでした。（40 年目の先生より）

- うまく表現できないが、さまざまな要素が繋がった感じがする。別々の概念であっても生徒の変容、成長のためには、相互に関連させながら授業単元を構想することが大切だと思う。学習過程で適切な評価を行ない、自己肯定感を高め、子どもの成長を引き出していきたい。（24 年目の先生より）
- 一人ひとりの子どもの成長を引き出すため、自己肯定感を高める取り組み、子どもの声を聞き受け止める教師の姿勢、違うことが当たり前だという気づきと短絡的な順位付けの無意味さの周知が重要だと思う。より具体的にまた一個人から徐々に実践者数を増やしていけば学校の文化として根付くのではないか。（34 年目の先生より）
- 子どもの成長を引き出すために重要なことを、受講前は小学生をイメージして書いたが、どんな子どもであれ話を聞いて認めたり共感したりすることが、ひとりの人間としての存在価値を上げていくものだと感じた。（6 年目の先生より）
- 評価を数値化するのは難しいが、価値づけはできると思いました。自己肯定感を高めるということが大切であり、そのための技術（スキル）は学べば身につきそうだと明るい気持ちになりました。ちょっと受講前は疲れていたのですが、受講後は前向きになれたので良かったです。OPPA だけでなく振り返りシートだけでも OK になると取り組みやすいですね。（30 年目の先生より）
- 表面的な支援だけでなく、子どもの自己肯定感を高めることにより新たな価値を見出すための力を発揮できるようになることが重要だと感じた。そういった働きかけができるようにしていきたい。（12 年目の先生より）
- 書いたり話したりする中で、教師と子供がお互いに思っていることが見えてくる。お互い影響されたり自分を通したりする経験の中で、自分ひとりでは見えてこなかったことが見えてくる。この繰り返しが成長につながると思う。今まで教師が一歩引いていたのがもう少し輪の中に入っているかもしれない。高校だからということもあるが、自分も議論する仲間になる。（8 年目の先生より）
- 以前からも意識はしていたが、子供自身の自己肯定感を高めていくことが本当に大切であると感じた。それを高めていくための教師側のアプローチ（本質的な問い）もとても大切である。（21 年目の先生より）
- 教員というのは未来ある子どもたちの心を育てているのだから、自信を持って大きな世界へ飛び出していけるような生徒を作成したいし、育成すべきだと思った。成長は一方通行ではなく行ったり来たりの繰り返し、粘り強く粘り強さが大切だと感じました（10 年目の先生より）
- ただ「OPPA について知りたい」と考え参加したが、辻本先生の話は子供たちにとって自己肯定感を高めることの大切さという根本的なことから語っていた。「評価のための

道具」としての OPPA を捉えていた自分の考えが恥ずかしくなった。もう一度学校に帰ってから、自分がやってきた OPPA を作り直して行きたい（8 年目の先生より）

- 成功体験という曖昧な言葉だったものが、自己肯定感を見出し、子供たちをよく観察するという教師として必要なベースの部分がどれだけ大切か、改めて研修を通じて気づきました。（14 年目の先生より）
- 目線が教師主体から子供主体になりました。身につけるべきことは必ずしも同じ一つのことではないのだと思います。同じ授業でも子どもによって考えるポイントや注目していることが違うのだと気づきました。子供がどのように行動すればよいか、ファシリテーターすることはやはり重要だと感じました。（19 年目の先生より）

◇山梨県総合教育センターの事後アンケートより

○研修会の内容や運営等でよかった点、改善した方がよい点など

- 講師の先生のお話が分かりやすく、とても勉強になりました。グループワークがあり、他の先生方と交流もできて良かったです。
- 受講者が付箋で「本質を問う問」を出し合えたことで、イメージがより具体的になった。聞くだけではなく参加型でありよかった。
- 二日間に渡って、このような講師の先生を呼んでいただき、とてもありがたかったです。
- グループワークでは、他校種の先生方と話ができ、校種によって考え方が違うことがよく分かりました。
- グループ分けも考えてくださったのかなと思いました。
- OPP シートをタブレットでしている方がいるのでしょうか。
- 場所が 2 か所あり、韮崎の合同庁舎での実施だったので、参加してみようと思いました。 3 時間くらいの研修でしたが、約 1 時間ごとに休憩をとっていただいたので、集中して、楽しんで研修を受講することができました。
- 2 回目ですが、評価について学ぶことがたくさんありました。
- 特に「主体的な学習に向かう姿」を数値化するのは難しいということに納得です。しかし、数値化できないけれどこういった姿が見られたという点を重ねていくことで、正しい評価にたどりつきそうです。その点では OPPA はとても有効だと思います。来年は、同じ学校の先生にお勧めしたいです。できればもう少し早ければ、閉庁日に重ならなくて参加しやすいかもしれません。
- 体験的に OPP シートの活用方法を学ぶことができ、大変ありがたかったです。

- アイスブレイクやグループ毎に行うワークショップなど実際に体験できる内容でとても良かった。自分の変容を書き記すことは大切で、どのような過程を経て自分の考えに変容が見られたのかを知る機会として OPP シートはとても効果的だと学ぶことができた。
- 様々な校種の先生方と意見交流ができ、とても良かったです。小学校と高校の先生では、想像している目の前にいる子ども像が大きく違い、そんな考え方もあるのだと新たな発見があり、学びを深めることができました。
- 辻本先生のご講義も楽しく、最初は長いと思っていた研修でしたが、あっという間に時間が過ぎました。ありがとうございました。
- グループワークを行う上で他校種の教員が交流できるようなグループを作っていただき、意見交換がとても有意義に行えました。ありがとうございます。
- 職場の若手職員を誘って受講したかったのですが、学校閉庁日であったため、誘いにくかったです。
- 辻本先生は、中学校現場に勤務なさっていた、ということで、受講者の心を巧みにつかみ、どの参加者も満足できる研修会であったと思います。主体的対話的で深い学びを師範してくださったと感じます。
- コミュニケーションでは「聞き手」の大切さが理解できた。
- OPP シートを導入する際によくある抵抗感として、毎回全ての生徒のシートをチェックしないといけないのか？という事がある。これに対して、チェックして全てを点数化するというよりは、形成的な評価として見る（例えば単元前後の変容を見取ってそれを点数化する）ことで、負担感と生徒の様子を観察するバランスが取れることが分かった。
- とても有意義な研修でした。また機会があれば辻本先生の研修を受講したいと思います。OPP シートのフレームがあると助かります。
- グループワークが中心で積極的に参加することができ、理解が深まった。
- ワークショップを通して、授業におけるグループ活動のファシリテートの仕方を学ぶことができたのがよかった。
- 講師の辻本先生のお話がとても分かりやすく、生徒の「自己肯定感」を大切にしようと改めて思うことができました。
- たくさんの資料で学ばせていただき、ありがとうございました。グループワークでは、さまざまな校種や世代の先生と意見交換ができて、とても有意義な時間になりました。グループによって真逆の意見だったり、個人や校種での考えの違いを知ることで、何を大事に優先し思考したり行動したりしているのかが分かり、違いを知ることで自分は何を大事にして思考しているのかを再確認することができました。

- ワークショップ形式で他校種の先生方と意見交換ができたのがよかった。
- とても良い時間を過ごすことができた。理科だけでなく、どの授業にも反映できるのも良い。講師もとても良かった。参加型だったので、不安も大きかったが、参加者もとてもよい先生方で、とても充実した研修となった。
- 異校種の教員とディスカッションでき、児童生徒に対するアプローチの仕方の違いを知ることができたのは貴重な経験になりました。一方で活動は多くありましたが主題が拡散し、焦点化されていないとも思いました。主体的に学習に取り組む態度や ICT のトピックも用意されていましたが、学習評価について主題を焦点化し理論的な説明を掘り下げたうえで実践に移す方法を検討したかったです。
- また、これは総合教育センターというよりもむしろ山梨大学に申し伝えるべきことですが、せっかく山梨大学との連携事業であれば、学生さんや教職大学院の院生さんにも広く門戸を開いて参加していただいた方が、現場と教員養成の場を繋ぎ、本県全体の教員養成にも資する研修会になったのではないかと思います。
- ワークショップを通して、講師の先生の実践を体験することができてよかったです。
- 温かで、和気あいあいとした雰囲気を作ってくださり、その中で学ぶと自然と主体的になるのだということを、疑似体験することができました。とても素敵な出会いをすることができました。ありがとうございました。
- 演習の時間が多く、スライドの説明をもう少し聞きたかった。演習もこのくらいの時間は必要だったので仕方ないですが、参加が小中高支援学校の先生方、教科も様々だったので、いろいろな意見や情報交換ができてよかった。講師の方がその分野では有名で、何回も講義に参加しているという方も多くて驚き、参加できたのはラッキーだったのかもです。こういう人気と実力のある講師の研修会は続けてほしいです。
- 講義と演習とのバランスが良かったです。講師の経験に裏打ちされた内容であった点もよかったです。
- 期待どおりの研修でした。理論だけでなく、グループワークを取り入れた実践も適切だったと思います。
- 「主体的な学習に取り組む態度」の評価とは、の問いとその答えをよく考えられたことがとても良かったと思います。校種が様々だったことも良かったです。
- 講師の先生がグループワークを取り入れながら講義を進めてくださり、他の先生方の価値観や考え方を知ることができて楽しかった。最後に質疑応答の時間があっても良いと思いました（講師の先生が研修後も残ってくださったので質問できました）。
- 講師の先生の話し方が上手で、集中して参加することができました。内容も、自分事としてとらえやすい内容であり、思考する時間やグループで共有する時間があったり、協働的に取り組む時間があったりと、充実した講習会となりました。ありがとうございました。

- 山梨大学や法政大学の教授との関わりがあり、普段聞くことのできないような内容が聞けてとても勉強になった。座席も他校種との関りがあり、様々な意見を聞くことができてよかった。
- 講師の辻本先生の人柄もあるが、実践も交えつつとても分かりやすい研修で、楽しく参加することができた。OPPA については理論も十分に知らないままに聞きかじりで自分もやっているのだが、今回この研修を聞くことで自分のやり方を見直す必要性を感じた。今までは「よく分からないが役に立ちそうな、新しい手法」程度の認識でいたが、まずは「生徒の自己肯定感を高めよう」「生徒が自ら考え、自ら答えを見つけ出せるようにしよう」という大本の考えを持ち、それを実行するための授業デザインの一つとして OPPA を実践するべきものである、と学ぶことができた。
- 実際にタブレットを使って、体験できたのがよかった。iPad が各学校に整備されると、支援が充実する部分もあると思った。
- 生徒が主体的に授業へ取り組むための方法や、生徒に対するアプローチのしかた、生徒との柔軟なコミュニケーションが必要だと改めて感じました。また、研修会のなかの「本質的な問い」を授業の中に取り入れ、学ぶ楽しさに生徒が気づき、主体的な学びにつながっていけるよう、今後の自分の授業に取り入れていきたいと思いました。
- 実際に体験を通して、OPPA の良さを実感できた。子どもの学習の変容をみとるだけでなく、自己肯定感を高めたり、メタ認知力を育てたりできることも実感できた。とても有効な研修だった。
- 適宜、グループ討議の時間を設けていただいて、自身の考えを広げることができ、また知見を深めることに繋がりました。ありがとうございました。
- 全員参加型の研修だったため、主体的に参加することができた。来年度も同じ講師の方に講義をお願いしたいです。
- 辻本先生の研修会のデザインそのもの、ワーク中の言動とつながりを持った講義が、自分自身の授業改善の視点として非常に有意義でした。参加者が少ないのが、残念です。もっと大勢の先生方に参加してもらって、学習観のアップデートを図って行くことの必要性を感じました。
- 辻本先生の聴講者をあきさせない実習形態と話術がすばらしく、あっという間の研修時間だった。また、スライドで実際の OPPA の画像や授業の動画を見せていただきよりイメージがしやすかったと思う。席順なども配慮されていて、異校種の先生の実践も話を聞けたのがよかった。

○この研修で得たことを今後どのように活かしていきたいか。

- とにかくやってみようと思います。最初は子どもたちが書けなくても、力がついていくのかなと思いました。OPP シートをタブレットでできないかと考えましたが、子ども達

とやり取りをしていくには、紙の方がよいのかなと思いました。過去を振り返るにも紙ベースでの蓄積がよいのかなと思いましたが、これからの時代を考えると、タブレットでの活用方法も考えていきたいと思います。

- まずは子ども達一人ひとりが考える力、文章に表す力、思ったことを素直に書ける力等の基礎基本も指導しながら、進めていきたいと思います。
- 「本質的な問い」をどのように立てたらいいのか、すごく悩んでいましたが「子どもたちの何を聞きたいのか」という先生のお話しから、２学期にこんなことを聞いて活用できたらいいなと思うことが浮かんできました。また、自己肯定感を高めるために、「ありのままの自分を受け入れることやそれを認め合えること」、「自分の存在価値を高めていけるような環境づくり」を今後、さらに意識して行っていきたいです。同じ学年の先生とも共有し、学年間で見取っていくためにＯＰＰシートを活用していきたいです。
- 自身の教育活動に生かしていきたいと思います。まずは、9 月に予定している研究授業で活用し、その後は社会科から取り組み、他の教科にも活用の幅を広げていきたいと思います。
- OPP シートについて、知らなかったので、講師の方のわかりやすい講義で理解し、勉強になりました。ダイヤモンドランキングを使って、道徳の授業をしてみたいと思いました。
- 「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、OPPA を活用することで、児童生徒の学習過程を可視化し客観的に捉えることができると思うので、活用方法等を学校訪問時の指導助言などに生かしていきたい。
- OPPA についての理解が深まりました。ワークショップをする中で、自分自身も褒められたり良いところを伝えてもらったりすることで、うれしい気持ちになり、子どもの自己肯定感や自尊感情を高めることが大切だと改めて気づきました。今後授業の中で「良いところ探し」を沢山したいと思いました。評価をするときに、自分の中でポイントを押さえているとよいことを知り、辻本先生に OPPA の見取り方を教えていただき勉強になりました。2 学期以降に活かしていきたいと思います。
- 自身の教育活動に生かしたい。OPP シートを活用し、本質を問える、生徒が何だろうと考えたくなるような問いを考える。そのことをベースにしながら単元の学習を行う。生徒が自分の変化に気付きながら学習に取り組めるような活動として、また、教師自身が自分の授業を改善していくヒントを得られるようにしていきたい。
- 「子ども達と係るための７つの原則」を通常学級も意識して行っていきたいと思った。また、子どもの「できて嬉しい」「分かって嬉しい」という気持ちを大切にした授業や指導を行っていきたい。
- 校内に広められるよう、職員に伝えていきたいです。

- 児童生徒の粘り強さ、自己調勢力の育成の視点から、「振り返りシート」に取り組んでいるが、ただなんとなく書かせているだけ、改善につながるフィードバックができていない、という現状も見受けられるので、本研修で得た事例や考え方を現場の先生方にお伝えしていきたい。
- 各教科「本質的な問い」をどう立てたらよいか、という点については、難しく感じることも確かだが、「子供主体の授業」の軸になるものでもある。また、参加していた現場の先生方の本質的な問いに対するお考えが、辻本先生がおっしゃっていたものに近づいていて、先生方の意識の高さや日々の実践のすばらしさに感心した。
- OOP シートは知ってはいたが使ったことがなく、実はよくわからないものだったので、この研修を受講して少しは理解できたのでよかった。小学校や理科ではかなり重要なアイテムだということがわかり、今後授業に活用できたらいいと思う。また、講師の著作を読んだり、他の先生に紹介してみたりしようと思う。
- 自己肯定感を高めることで、主体的に、学び合う雰囲気が生まれると感じました。学年の実態に合わせて、日々の学習の状況を見取って、肯定的な評価をし、教師自身も子どもたちも学びが調整できるようにしていきたいです。
- OPP シートの活用について考える良い機会となった。今回自分が参加したグループでは中高校の先生から、あらゆる活用法についての話があった。OPP シートには本質的な問いを設定するが、自分も教材研究をして児童に投げかけていきたいと思った。汎用性の高いもののため、２学期からいろいろな教科で使っていけたらと考えている。
- 授業において、OPP シートを活用していきたい。まずは、フレーム作りから考えていきたい。
- OPP という手法について再確認できたので、これまでチャレンジしていた OPP シートのやり方をよりよく改善していく。その際に生徒の「自己肯定感」を高めることを意識する。また、「問いの立て方」を目の前の生徒の実態に合ったものにしていく。
- 評価の在り方について、OPPA はもちろんワークシートでの振り返りも活用しつつ評価していくのがいいと思いました。そして有効だと紹介したい。単元の前と後だけでなく、学ぶことを通して単元や教科の「見方考え方」にどう迫るのか見取っていくことが必要。
- この講習会で強く感じたことは、『自己肯定感を高くもつことの重要性』です。くじけそうな時、何とか乗り切ったり復活したりする力となって自分に返ってくることが実感でき、子どもたちに身に付けさせたい大きな力だと強く思います。そして、身に付けさせるために、傾聴姿勢を大切にして子どもに寄り添い、うまくいったときには褒めたり困っているときには相談にのったりアドバイスをしたりして、子どもの自尊感情を高めていきたいと考えています。その上で、本質的な問いを重要視し、見取りやふり返りを実践していこうと思っています。
- OPPA を取り入れた授業を行う。また、校内で共有したい。

- ダイヤモンドランキングをうまく授業や研修で使えればよいと思った。
- OPP シートを活用して、児童の学びの変化をしっかりと見取り、授業に生かしていきたいです。研修で教えていただいた記号も活用しながら、効率よく授業づくりを行っていきたいです。
- まずは、自分が持っている地理の振り返りの形態に活かしていきたいと考えている。
- 現状全て読んで、全て点数化する状態であるため、変化を見ることにより役立つ形態に出来たらと思う。
- OPP シートを三観点評価の内「主体的に学びに向かう姿勢」の評価に生かしたいと思い研修会に参加させていただいた。しかし、三観点評価に入れてしまうことで逆に生徒に与える教育効果を下げてしまう可能性があることを知り、安易に利用するべきではないと感じた。また他校種の先生方と意見を交わすうえで、重視する生徒の資質能力が校種によって全然違うことを学ぶことができたため、これからの生徒指導に生かしていきたいと考える。
- まずは自分自身が見よう見まねでやっていた実践を、もう一度見直していきたい。自分の実践には「生徒の自己肯定感をどう高めるか？」という思考がなかったので、そうした問いかけを自分自身に投げかけながら、それを実行するための一手法として OPPA を改善していきたい。また、同じ学校の先生で自分の実践を真似ている人もいるので、そうした人に対してきちんと理論を踏まえて正しく教えられるようになっていきたい。何よりも、改良を加えながらこの実践を続けていくことで、生徒がどう変わっていくか、どのように自己肯定感を身に着けていくか、しっかりと観察していきたい。
- どの授業でも活用できる、すぐに実践できる研修であったので、2 学期実践してみたいと感じた。
- OPPA 理論は、私自身の実践につながるものであったので、学年の教諭たちにも共有し、学年全体で取り組んでいきたいと感じた。特に、2 学期は、学習以外にも学校行事などでの取り組みもできるので、積極的に活用していきたいと思う。
- 夏休み中に OPPA を用意して数種類の教科で単元計画を考えたい。また、２学期実践する中で学年や研究会で共有して意見をいただいて授業改善をしていく。３学期でも継続できるものは改良をしていく。
- どの場面で活用できるか検討し、実践してみたいと思った。
- 学習評価について、校内研究でも取り上げて行っています。学習評価の見方に付いて、様々な方向から多角的に学びたいと思って受講しました。研修を受けて、OPP シートを用いての評価や児童生徒の変容の読み取り方を学ぶことができました。知的障害のある特別支援学校なので、自己評価やメタ認知には課題があるところではありますが、児童生徒がどのような様子で学習に取り組み、その学習を自分でどのように評価したのかを教師が整理して把握することができれば、活用にもつながるのかなと思いました。

- 改めて形成的評価の意義と重要性を感じました。校内でも教科内や他教科も含め、どのように生徒の学びを見取り、指導の改善に生かしていくか、具体的に話をしてみようと思います。研修会の主題からはやや離れるかもしれませんが、自らの教科に引き付けていえば、自己肯定感の市民性との関連性について、自他の価値を認めることが差別や不平等、不正の是正につながっていくという点は重要だと感じました。授業を通しどのような市民を育成するかということを考え、問いを立てていきたいです。
- 機能的な校内支援体制を構築するために、「個別の指導計画の作成と活用」について着目しながら、研究をしています。個別の指導計画をチームで作成し活用したことによる、教師や児童の行動変容について、OPP シートを活用しながら、研究を進めていきたいと考えるようになりました。活用の仕方について、さらに講師の著書等を読み、学びを深めていきます。
- 研修会で自己肯定感の高まり等について大切なことを伝えていきたい。
- 子どもたちの素直な考えや感想を引き出すためにはまず、評価に直結しないものとして扱うことが大切であり、その一助として活用していくことで子どもたちの学びに向かう姿勢を知ることができる。まずは体育など実技科目などに取り入れ、自分の考えやコツ、できるようになったこと、疑問点など素直なもの書かせ、自分の現状を知る資料として活用していきたい。
- 主に自身の教育活動ですが、校内研究の場で使える場面が今後考えられます。
- 自分自身の授業改善。生徒の自己肯定感を育む働きかけ、職場での情報提供。
- 授業実践に活用したいと思います。これまで、OPPA は次時の授業作りに生かしたり、コメント記入等で考えの変容を促したりなどの活用に留まっていました。これからは、自己肯定感を育む視点から「いいところ探し」も実践していきたいと思いました。また、校内研究でもテーマに対する考えなどを本質的な問いに設定して活用してみたいと思いました。
- 評価については利用していくうえで課題はありますが、生徒の自己肯定感を高めていくためにも自分自身の授業改善にも役立つ内容であったと感じています。2 学期以降の授業で使用していきたいと考えています。
- 評価を今回学んだ方法でやってみて、生徒自身の振り返りなどに生かせるようにしていきたい。
- 評価の仕方や、評価の考え方が変わりました。OPPA を活用するにあたり、その子の強みを見つけられるような評価をしたいと思いました。
- 本研修で紹介されていた OPPA シートを導入してみようと思いました。
- 毎日の授業において評価を行うポイントの見直しとなった。
- 生徒への効果的な問いかけ、評価方法の見直しをし、生徒が主体的に学びに向かっていけるような指導をしていきたいと思いました。

令和６年度　第１回　不登校の子どもを支える保護者の会

親業セミナー＋情報交換会　報告

山梨大学教育学部附属教育実践総合センターでは、山梨県教育委員会と連携し、「親業スキル①：子どもとの関わりポイント」をテーマにセミナーを行う取り組みを実施し、その後保護者同士の活発な意見交換を行いました。

今回初めての試みとして親業セミナーを行いました。お子さんとの関わりの中で活用していただける親業スキルについて紹介しました。具体的にお子さんへの対応やお子さんへの声掛けのポイントや不登校のお子さんの心のエネルギーの状態を推察するために用いられている心のエネルギー曲線についてお伝えしました。意見交換では、お子さんの年齢が近い保護者の方を同じグループとして情報交換を行っていただきました。各ご家庭で取り入れている有効な支援に関する情報や家での過ごし方等について活発な情報交換が行われ、県教委の先生にも具体的なご助言をいただきました。

１．　実施日

令和６年９月１０日（火）　１０：３０～１２：３０（受付１０：００～）

２．　参加者

１３名にお申込みいただき、８名参加

３．　場所

山梨大学甲府キャンパスＬ号館Ｃ棟（LC-１３、LC-１５教室）

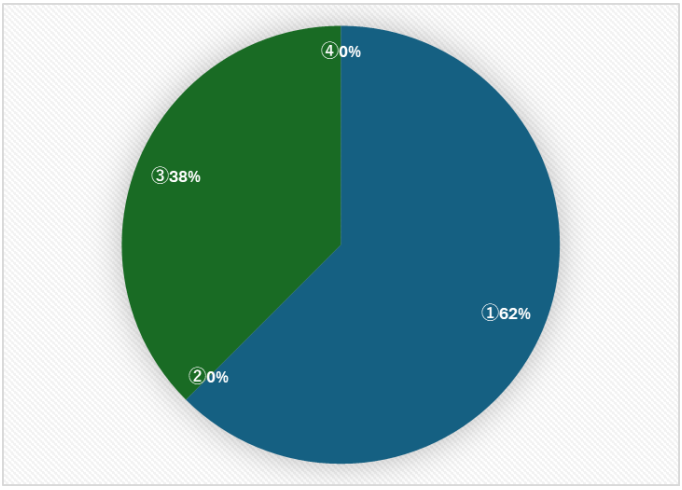
４．　情報提供

・　山梨県総合教育センター　相談支援センターパンフレット（山梨県教育委員会より）
・　山梨大学教育学部附属教育実践総合センター　教育相談室　紹介チラシ

アンケート結果

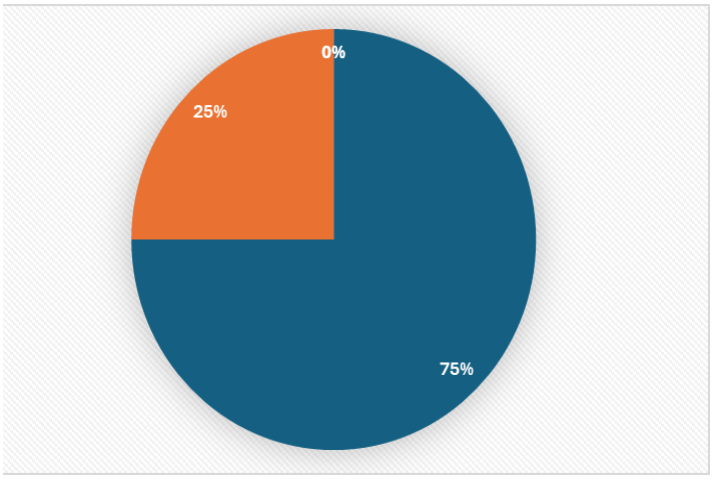
問１　本会の開催をどのようにお知りになりましたか

① 学校から配布されたチラシをみて　　６２％（５名）
② 先生からのすすめで　　０％（０名）
③ 知人からのすすめで　　３８％（３名）
④ その他　　０％（０名）



問２　本会に参加していかがでしたか

① よかった　　７５％（６名）
② まあよかった　　２５％（２名）
③ よくなかった　　０％（０名）
④ わからない　　０％（０名）



問３　今後の情報交換会のテーマについてご希望があれば

・不登校中の家での過ごし方
・進路情報
・子ども同士の交流機会
・不登校児のその後
・子どもの居場所ついて

問４　不登校の子どもを支える上でどのようなサポートがあると良いでしょうか

・子ども同士が交流できる機会がほしい
・情報交換の機会を増やしていただきたいです
・ありがとうございました
・このような会を定期的に多く開催して欲しい（回数を増やす）
・子ども同士が交流できる機会が欲しい
・今回のような意見交換の場を沢山設けていただきたいです
・学校に行けない間のサポート　居場所、支援員など
　解決してくれる提案が欲しい。話を聞いてくれるだけなら要らないです。
・低学年の不登校児に対する支援の拡充
・子どもが安心していられる場所が欲しいです。親元を離れても居られる場所

今後の課題と次回に向けて

令和６年度　第１回　不登校の子どもを支える保護者の会　親業セミナー＋情報交換会では、新たな取り組みとして親業セミナーを合わせて実施しました。不登校の子どもたちを日々支えている保護者の方たちの何らかの手がかりになっていればと思います。残念ながら参加者が例年よりも少なかったことから、次回に向けて周知方法の見直しや開催時期・曜日等を工夫していくことが今後の課題となりました。
また、不登校の子どもを支援するうえで必要なサポートとして「子ども同士が交流できる場所や居場所が欲しい」というご意見がありました。特に不登校の低年齢化が指摘されている昨今の状況におきましては、こうした子どもたちへの直接的なサポートを模索していくことが今後の課題であると考えます。
ご参加いただきました保護者の方々、ありがとうございました。

山梨県立高等学校　情報科の授業視察等の報告

本年度（令和６年度）山梨大学に赴任し、山梨県の現状を把握するために、山梨県立高等学校の授業視察や情報科の方向性について検討する会議に出席して参りました。それぞれの視察結果を報告いたします。

１．７月９日　　山梨県立北杜高等学校

- 総合学科　１年生
- 情報／情報Ⅰ
- 情報通信ネットワークとデータの活用　データの可視化

2．７月 12 日　山梨県立韮崎高等学校定時制

- 定時制普通科　２年生
- 情報／情報Ⅰ
- 情報社会と問題解決　著作権

3．９月９日　　山梨県立富士北稜高等学校

情報科として採用された先生方や情報科に関わる指導主事の先生が集まり、情報科の今後のあり方について議論しました。授業や教材の共有を含め、情報発信の重要性についても検討して参りました。

4．９月 24 日　山梨県立都留高等学校

- 普通科　２年
- 情報／情報Ⅰ
- コンピュータとプログラミング　２進数

5．９月 24 日　山梨県立都留興譲館高等学校

- 普通科　１年
- 情報／情報Ⅰ
- コンピュータとプログラミング　暗号化

6．10 月４日　山梨県立日川高等学校

- 普通科　１年
- 情報／情報Ⅰ
- 情報通信ネットワークとデータの活用　データの分類

7．10 月 25 日 山梨県立白根高等学校

- 普通科　１年
- 情報／情報Ⅰ
- コンピュータとプログラミング　アルゴリズム

山梨県立高等学校は、それぞれの地域や学校ごとに特色と課題があり、その解決の糸口を見つけるために、今後もこのような地域の学校視察を継続して行っていきたいと考えています。

やまなし情報教育推進室 先進校視察報告

やまなし情報教育推進室

ICT を活用した探究的な学習に先進的に取り組む東京都の小学校を視察してきました。STEAM 教育や教科等横断的な学習における ICT 活用のヒントを数多く得ることができました。

1　視察日　2024 年 10 月 22 日

2　視察先　葛飾区立東金町小学校（第 49 回パナソニック教育財団　特別研究指定校）

3　訪問者　中込司，三井一希，稲垣俊介，佐々木智謙

4　目　的

(1) ICT を活用した探究的な学習に先進的に取り組む公立学校を視察することで，教員養成段階での情報教育の充実や情報活用能力の育成のためのヒントを得る。

(2) 先進校と東京学芸大学との連携体制の実際を視察し，本学と山梨県内の学校との連携体制の充実に資するヒントを得る。

5　内　容

(1) 授業視察

・1 年生から 6 年生までの授業が公開された。

・「習得」,「活用」,「探究」の 3 つのフェーズに分かれた授業が行われた。「習得」は基礎・基本の定着を目指す内容であった。「活用」は問題解決型の授業であり教師が課題提示をしてから問題解決へ移るような授業であった。一方,「探究」は課題や計画は児童が自ら設定し，好きなことを追究する個人探究のような授業であった。習得と探究をつなぐカリキュラム開発の実際を視察することができた。

・１人 1 台端末やクラウド環境を基盤に，STEAM 型の教育が全校で実施されていた。

・カリキュラム・マネジメントを通じて教科に準拠した探究を行う工夫が見られた。

(2) 研究協議会

・東京学芸大学教授 北澤武氏の講演を拝聴した。

・ジグソー学習の手法を取り入れ，学校の取組をブース毎に担当者が説明する形式で進められていた。

・東京学芸大学が東金町小学校と密に関係を築き，日頃から学校支援や授業アドバイスに入っている関係性が見られた。

6 所　感

視察した東金町小学校では，ICT の日常的な活用や教科等横断的な問題解決をする STEAM 教育を通じて児童が主体的に学習に向かう工夫が行われていた。また，学校の実践を支えるために東京学芸大学と連携し，年間を通じて大学教員の訪問指導が行われていた。大学と学校が連携しながら授業改善に取り組む好例だと考えられる。

教員養成段階で ICT の操作スキルを十分に習得することはもちろん，STEAM 教育の視点からカリキュラム設計や授業デザインができる学生の育成は急務である。

第４５回教育フォーラム

ICT を活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現
－これからの授業の在り方を考える－

これからの時代を生きる児童生徒の資質・能力を育成するためには、どのような授業が求められるのでしょうか。教師は、これまで知識を伝える授業が多く、伝えることを自分の存在価値のように思いがちですが、これからの授業をデザインするにはその指導観を変える必要があります。

これまでの教室で見られた教師が子供を教えるような授業だけでは、これからの社会を生き抜くための資質・能力を育成することができません。自ら見通し（学習計画）を立て、他者と協働しながら調べ、考え、自分なりの答えを導き出すような主体的な学びが求められています。

そのためには、学びのプロセスをどのように考え進めたら良いのか、学びたいという子供の意欲をどのように喚起すればよいのか、教材をどのように準備すればよいのか、ICT をどのように活用するのかなどを十分に検討し、児童生徒の学びに寄り沿い支援する指導観が求められます。

児童生徒が自ら学び方を選択し、自立した学習者になることを目指した授業となるよう教師が指導観を変え、それに基づいた授業デザインを実現することが重要となるのではないでしょうか。

これからの授業の在り方をみなさんで意見を出し合い、考えていきませんか。

【日時】令和７年１月３０日（木）
午後 6:00～8:00　　対面とオンラインのハイフレックス方式での開催

【会場】山梨大学甲府キャンパス　Ｊ号館５階Ａ会議室

【講師】三井　一希（山梨大学教育学部附属教育実践総合センター　准教授）

【実践発表】
小澤　祐太郎（北杜市立明野小学校教諭）
荻原　佐知（甲州市立塩山中学校教諭）

【コーディネータ】稲垣　俊介（山梨大学教育学部附属教育実践総合センター　准教授）

【入場料】無料

【対象者】教員　学部学生　大学院生　大学等の研究者
県内外の教育関係者　一般市民の皆さん
【主　催】山梨大学教育学部
【共　催】山梨県教育委員会（予定）
【後　援】甲府市教育委員会（予定）

【お問い合わせ先】山梨大学教育学部附属教育実践総合センター（事務室）
TEL：055-220-8325　FAX：055-220-8790　　E-mail：edjissen-as@yamanashi.ac.jp
【申し込み】12 月初旬から Forms にて受付開始
センターHP に案内(QR コード)を掲載・県内学校等に通知を発出予定

●「地域学習アシスト事業　成果パンフレット～5 年間のあゆみ～」が完成しました。

教育ボランティアの発展形として実施している「地域学習アシスト事業」が本年度で 6 年目を迎えました。そこで、活動を開始した令和元年から現在までの 5 年間のあゆみの記録として、成果パンフレットを作成いたしました。「地域学習アシスト事業」とは、山梨県教育委員会、甲府市教育委員会、地域の学校と教育学部が連携を行い、地域の学校と本学の学生及び大学教員が、学校の教育課題を共有し、協働して解決策を探りながら、当該学校の教育活動を支援することにより、学校が抱える教育課題に対応できる実践的な能力を身につけた教員養成を行っていくものです。 成果パンフレットをご覧いただき、引き続き、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

地域学習アシスト事業によせて

甲府市教育委員会　教育長
松田 昌樹

学校現場においては、いじめ認知件数や不登校児童生徒の増加をはじめ、配慮が必要な児童生徒の増加等、様々な教育課題が山積しております。

そのような中、本市においては、4つの小学校において、山梨大学学生による「地域学習アシスト事業」を実施しており、教育実習や教育ボランティアを経験した学生の皆さんが、学級の課題点等について話し合い、その課題を解決するための取組を進めております。この取組により、教職に対して志の高い学生が、チームで子どもたちに関わることで、担任とは違う視点からの課題解決に向けてのアプローチがあり、児童の成長につながっています。また、学生にとっても、教育実習より長いスパンで学校と関わり、様々な教育課題の解決策を探ることで、教職における実践力を高めることにつながっています。学校現場からは、「個別に支援が必要な児童に声をかけてもらったり、ノート指導をしてもらったりしてとても助かった。」「授業に集中できない児童や、気持ちが乗らない児童などに寄り添った対応をしてくれた。」等の声が出ています。

本事業に関わった学生の中には、卒業後、すぐに本市立学校に採用され、経験を生かし、採用初年度から活躍している教員もおります。

今後もこの事業が、甲府の子どもにとっても、また山梨大学の学生にとっても素晴らしい取組になることを願っています。

山梨大学教育学部　学部長
服部 一秀

地域学習アシスト活動事業は、新たな課題に対応できる実践力のある教員の養成を目的として、地域に根ざしながら進めてきた事業です。アシスト活動に参加した教育学部の学部生は、長期にわたる取組を通して、自らのこども観や教育観などを深め、実践的な力を高めています。入職後も学び続ける姿勢を失うことなく、この活動の経験を活かして活躍しています。また、アシスト活動は、学部生の取組を支援する教職大学院の大学院生にとっても、自らの実践や実習を振り返り、学びを深化させる機会となっています。

このような事業は大学だけでは不可能です。連携先の地域の教育委員会や学校に心より感謝申し上げます。また、児童への多様な支援、課題解決のための情報・知見などにおいて、本事業が連携先からも評価いただけていることを大変嬉しく思っております。地域学習アシスト活動事業は、文部科学省「教員養成大学・学部、教職大学院の取組状況について～グッドプラクティスの共有と発信に向けた事例集～」（令和6年3月）において好事例として取り上げられました。大学と地域の双方にとって互恵的な取組である本事業を今後も進めてまいります。

地域学習アシスト事業を経験して

地域学習アシスト事業を経験した卒業生に、自身のあゆみや学んだことなどを聞きました。

私は、在学2年間、地域学習アシスト活動に参加しました。
活動を通して、担任とは違った角度で子どもたちの学習の様子を見ることができるため、子どもがどのような所でつまずくのか、どんな得意不得意があるのかを知ることができました。また、様々な先生方の授業の進め方や、子どもとの接し方に触れることができました。さらに、実際に小学校に行った後に大学で行われる「カンファレンス」では、疑問に思ったことや悩みを共有でき、それがまた一つの学びにつながっていました。
今私は、山梨県内の小学校に勤務していますが「あの時こうだったな。」「こんな時こうしたら良かった。」と振り返りながら、学んだことを現場で生かすことができています。
このような学びの場をくださったことに、感謝の気持ちでいっぱいです。

令和4年度卒業生

私は現在中学校で、1学年の特別支援学級の担任をしながら、1年生に理科を教えています。地域学習アシストを約1年間行ったことで、生徒と積極的に関わろうとする意識をもつことができたり、支援が必要な生徒に自ら気づいて支援することができたりしているように感じます。実際に校内指導教諭からも1学期の成果として「自ら進んでコミュニケーションをとり、生徒とも良好な人間関係を築くことができている。また、個の気持ちに寄り添った声掛けもできている。理科の授業の中でも、困っている生徒を見つけると、その生徒に合った声掛けやサポートができている。」と言っていただけました。地域学習アシストで1年間学んだことを現場でも生かすことができており、地域学習アシストに関係する方々に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

令和5年度卒業生

山梨大学教育学部附属教育実践総合センター　教職支援室
〒400-8510　山梨県甲府市武田4-4-37
TEL.FAX：055-220-8748
E-mail：edu-kys@yamanashi.ac.jp

令和6年10月発行

地域学習アシスト事業

事業成果パンフレット
～5年間のあゆみ～

「地域学習アシスト事業」は、地域の学校に教育学部生がサポートに入り、自ら課題設定をし、大学院生や大学教員等とのカンファレンスを通じて課題解決方法を見つけていく活動として、6年目を迎えます。本事業は、山梨県教育委員会、甲府市教育委員会、地域の学校と教育学部の連携により、多くの先生方に支えられ成長を続けています。本紙は、活動を開始した令和元年から5年間の歩みの記録として作成したものです。

令和6年10月　山梨大学教育学部附属教育実践総合センター

新たな課題に対応できる実践的な能力を身に付けた教員の養成

地域学習アシスト事業とは？

「地域学習アシスト事業」は、山梨大学独自の取り組みとして、令和元年度にスタートしました。従来の教育ボランティアの活動をより充実させることで学生の実践力を高める取り組みです。学部生、教職大学院生等と大学教員がチームとなり活動します。

具体的には、小学校で支援の必要な児童へのサポートと、これについての「チームカンファレンス（以下、カンファレンス）」を大学で行います。学部生が小学校で活動する際には、大学教員が学部生に同行、学校との調整や学生に対して助言を行います。活動後には、大学教員、教職大学院生等とカンファレンスを実施し、子どもの行動の分析や、関わり方について意見交換しながら次に活動する際の方針を考え、実践に生かします。これを繰り返すことで、新たな課題に対応できる実践的な能力を身に付けます。

地域学習アシスト事業のあゆみ

1年目　「地域学習アシスト事業」スタート！

文部科学省「教育研究の質の向上の状況に係る注目事項」として評価

教育ボランティア活動の発展形として地域学習アシスト事業（以下、アシスト活動）がスタートしました。学部生が小学校で活動を行った後、大学に戻り、活動を行っている学生、現職教員を含めた教職大学院生、専攻科生、大学教員が、その日のうちに毎回カンファレンスを行い、学部生の気になったことや悩みを聞き、次回に向けて解決策を話し合いました。

カンファレンスでは、大学院生がカンファレンス内容をホワイトボードにまとめることで可視化し、他の学校の同じような課題やその解決策など、様々な情報を共有できるようにしました。

2年目　活動の改善を図る！

カンファレンスメンバーを増員（1年目18名→2年目22名）し、カンファレンス活動を充実させました。また、事前説明会の実施、サポートシート（児童の行動や学生が行った支援を記録するシート）の改善、カンファレンスの運営改善、学校へ成果の共有など、1年目の事業で見えてきた課題を解決しながら活動を行いました。

3年目　活動期間の拡充！

半年のアシスト活動を約１年間に拡充、クラスの実態を丁寧に把握し、児童や先生たちと信頼関係を築くことを重視する活動期間を設けました。これを「アシスト活動A」としました。

アシスト活動Aの次の段階を「アシスト活動B」とし、カンファレンスを充実させることでより高い実践力を身に付けることを目指しました。

4年目　活動規模の広がり！

アシスト活動A・Bを実施したことで、児童・学級の理解、学びが深まりました。これに伴い、活動する学校数を３校から４校に、学部生を６名から８名にして活動の規模を大きくしました。

さらに、教育行政・管理職経験のある「地域学習アシストアドバイザー」を採用し、より包括的なアプローチが可能となりました。

5年目　活動の定着！

文部科学省好事例（グッドプラクティス）として評価

アシスト活動も５年目となり、活動が定着してきました。そこで学校側にできるだけ負担なく受け入れてもらえるよう工夫しました。具体的には、毎回行っていた大学教員の授業の参観を月1回程度にしました。また、学級担任との打ち合わせの時間をあらかじめ決めるのではなく、状況に応じて柔軟に設定することにしました。

その結果、時間的な余裕が生まれ、これまでよりも丁寧に打ち合わせを行うことができるようになりました。細やかに児童についての情報を共有し、支援方針について協議を重ねることで、実態に合った支援の質が向上しました。

カンファレンスの様子

学生・学校の声

大学生

活動を行ったことで支援に入るタイミングや入り具合を見極める力、臨機応変に対応する力が付いた。実際に教育現場に立った時にものすごく生かされるのではないかと感じた。

アシスト活動内でどうすれば良かったのかわからずモヤモヤした部分をカンファレンスで共有し、色々な立場の方からもらった意見やアドバイスがとても勉強になった。

現場の実態に即したアドバイスやお話を伺うことができ、自分の知識を深めたり、広げたりすることができた。また、カンファレンスがあったことで、疑問点をそのままにせずにその日のうちに解決し、次につなげることができた。

大学院生

大学生自身の課題を共有し、その課題について全体で検討したことが非常に勉強になった。課題を活動回ごとに用意してくれていたので、課題を焦点化して検討できたことがよかった。

児童との関わりや支援における自己の省察や児童の実態考察を行うとともに、教員や院生とのカンファレンスを通して、それらに対する助言を受けることにより、確かな経験として本人の力量となっていたと感じた。

学生たちが教室で直面している問題に対して客観的な立場から状況を考え、対処法などを考える事ができ、現場に戻った時も自分自身の教室で起こっている問題に対して客観的に考えることができそうだと感じることができた。

学校

アシストでは、大学生が子どもを理解して支援する・育てるという教師と同じ視点に立ち、指導者として主体的な活動をしようという意識が高まったように思う。

アシストが入ることで、担任としては、授業中での気付かなかった児童の様子を教えてもらったり、細かな支援に入っていただいたり、自分の指導を改めたりでき、自分自身の指導力向上にもつながった。

学校内ではないかたが、子どもたちの学習や活動を支援していただく中で、学校職員とは違った視点で成果や課題を感じ、学校に返していただけたことはとても効果的だった。

地域学習アシスト検証会議

地域学習アシスト検証会議では、「地域学習アシスト事業」の活動を終え、教員として1年間過ごした卒業生に対し、聞き取り調査を行っています。

「地域学習アシスト事業」を通して学んだことが、現在、児童生徒と関わる中でどのように役立っているのかなど、意見を交換しています。この過程では、学級運営など互いの悩みを相談することもしています。ここで出た意見は、次年度の「地域学習アシスト事業」の活動を改善するために役立てています。

アシスト活動参加人数

学部生　：32名
教職大学院生等　：61名
大学教員　：35名
（R１～R5の延べ人数）

アシスト活動A：6月～10月頃

○学習面や生活面等の支援を行いながらアシスト先のクラスの実態をつかみ、児童や学級担任と信頼関係を築くことを目的として活動します。

アシスト活動B：11月～2月頃

○アシスト活動後に毎回アシストチームとカンファレンスを行います。
○学校の課題解決に向けた取組を行い、実践力を身に付けることを目指します。

■１２・１月の主な行事予定

12～1月の 行事予定 **山梨大学教育学部の 関係行事を含みます**	**研　修** 〇第45回教育フォーラム ICTを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現 ーこれからの授業の在り方を考えるー 1月30日（木）　18:00～20:00 ・・・・教員、学部学生、 大学院生 、大学等の研究者、県内外の教育関係者 一般市民の皆さん ※対面とオンラインのハイフレックス方式での開催 **教員採用試験対策講座** 〇時事通信出版局による模擬試験１ 12月14日(土)　13:15～17:30・・・・2・3年、M1 **進路支援** 〇ウォーミングアップ講座２～二次試験対策の基礎・基本～ 1月31日(金)　16:30～18:00・・・・3年、M1 **教育ボランティア** 〇教育ボランティア報告会 12月11日(水)　14:50～16:20・・・・全学生